
Calling her name

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Calling her name

【Nコード】

N7913C

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

新蘭、平和、快青とオマケが2話と後書きです。全部で6話ですが、達成できていないかもしれません タイトルの通り、名前のことについてです。読んだら分かります（そりやそうだ） ということなので、読んでくれたら嬉しいですよ（*^_^*）

Case 1 新一 and 蘭

それは、彼女の一言から始まった。

「ねえ、新一。どうして私のこと『蘭』って呼ぶの？」

秋の涼しいある日のこと。大学生になっても忙しい探偵の工藤新一を、彼女の蘭の方に勢いよく振り向かせるには十分の一言だった。

「は？」

「だからあ、どうして私を『蘭』って呼び捨てにするようになったの？」

幼なじみの2人は現在恋人となっている。

探偵として、新一はまず質問することにした。

「何で突然そんなこと思ったんだ？」

「うーん…。特に理由は無いんだけどね？ 何となく、かな」

「ふーん」

「それでそれで？ 何で？」

「蘭は『蘭』って呼ばれるのが嫌なのか？」

「え、嫌じゃないよ！？ むしろ、1年生だった時の『毛利さん』の方が何だか呼ばれて辛かったしね」

「あはは、あの時なあ…」

小学校に入学した時、照れと見栄から呼ばなくなった蘭の名前。あることをきっかけに、再び『蘭』と呼ぶようになるのだが…。しかし、あの時の蘭の目はマジでヤバかった…と新一は自然と頬が

染まる。

「どうしたの？」

「え、あ、いや。何でもねえ」

「早く教えなさいよ！ …それとも、何か言えない理由でもあるの？」

と、やはり上目遣いで見てくる蘭は、大人っぽさと可愛さのどちらも兼ね備えていて…？

どんどん顔が赤くなる新一は熱でもあるかのようにだった。

探偵としてのポーカーフェイスも、彼女の前では形無しとなるらしい。

この蘭の目、他の男の前でやるなよと、心中で思いつつ。

「や、そういうわけじゃねえ。『蘭』って呼ぶ理由だよな？ えー

っと…あれは確かまだ保育園の時だったかな。母さんがオレに言い聞かせてたんだよ」

『いーい？ 新ちゃん。蘭ちゃんは将来新ちゃんのお嫁さんになる

んだから、他人行儀な呼び方はしちゃダメよ？ だから、そうね…。

呼び捨てにしないで。 “蘭” って。分かった？』

『うん！』

「新一のお母さんが…」

「そ。だから、あれ以来『蘭』って呼ぶのが普通になっちまったってわけ」

「そうだったんだ」

「だから、責任持ってオレの嫁になれよ？」

「なっ…！」

互いに真つ赤の2人は端から見たら「あてられた」と首を呆れたように振るだろう。

もつとも、ここは工藤邸なので、そんなことをする人もいないのが唯一の救いである。

隣家の小さな科学者は、「いつものことよ」とクールに言い放ちそうであるが。

「それより、蘭」

と赤いまま気を取り直して新一が尋ねる。

「何で突然そんなこと思っただよ？」

「え、あー、うん。実はこの間、大学でね？ 園子と和葉ちゃんと

青子ちゃんと話してる時に…」

『幼なじみっていいわねえ。みんな呼び捨てにされちゃって、愛されてるわね』今度、何で呼び捨てなのか、聞いてみなさいよ？』

「園子の入れ知恵かよ…。ま、今回は園子に感謝してるけど」

「何で？」

「最近、忙しくて全然蘭と一緒にいらなかったしさ。こうしてゆっくり話すのも久々だから」

「そうだね」

ソファに座ってゆったりと体を寄せる2人は相変わらずで。

隣家の小さな科学者にとっては、やはりタメ息ものなのである。

Case 1 新一 and 蘭（後書き）

お久しぶりの方もそうでない方も、こんにちは。ペロコです。

受験だからという理由で『名探偵コナン』キッドside』を止めたんじゃないかったのかよ！ という突っ込みが聞こえてきそうですが…。スイマセン！

どうしても書きたかったのです。普通のお話を。

その『キッドside』ですが、たくさんのご感想ありがとうございます。すぐ感動しています。たくさん「続けてほしい」とのお声が涙を誘います。というか、本当に泣きそうです（泣）お一人一人返信をしているので、よかつたらご覧になってください。

ということではじめた（一応）ラブラブのお話。まずは新一と蘭ちゃんからなんですが。完全に妄想入ってます！ 新一が、有希子さんに「蘭」と呼べといわれたかどうかなんて知りません。（爆）

順番では、次は平和のお話ですね。予定では今週土曜日に更新予定です。短いのですが終わると思います。10月中に終わらせるぞー！！（目標）

では、感想などいただけたら嬉しいです。
これからもよろしく願いますね。

Case 2 平次 and 和葉

東都大学に通う関西弁のコンビとして有名なのが、服部平次と遠山和葉である。

服部平次といえば、高校生の時から、工藤新一と同じように高校生探偵として難事件をいくつも解決してきており、剣道の腕は、大阪府警の強者を1人で倒したという噂を持つ色黒の男である。

遠山和葉といえば、その幼なじみとして、平次を小さい頃から支えてきた、合気道2段の文武両道かつ綺麗な女性である。

漫才コンビから恋人へと変わったのは、まだ最近のことであるせいなのか、はたまた2人の性格ゆえなのかは定かではないが、2人の雰囲気の違いが分かるのは、ごく少数の人間だけであった。

さて、秋になって涼しくなってきたこの日に、喫茶店での和葉の発言から今回のテンポのいい会話は始まった。

「なあ、平次？ 何でアタシのこと呼び捨てにしてんの？」

「へ？」

アイステイーをストローでくるくる回しながら唐突に言われた質問に、平次はすぐに答えることは出来なかった。

「せやから、何でアタシを呼び捨てにしてんの？」

「何や、和葉。『和葉ちゃん』とかいう風に呼ばれたいんか？」

「嫌やわ、気持ち悪い」

「気、気持ち悪いって何や！　オレかてそんな風に言いたくもないわ！」

「……ってそういうことやなくて！　何で呼び捨てなんか聞きたいだけや」

「ふーん？　何で呼び捨てにするか、なあ……。氣いついた時には、もう『和葉』って呼んでたからなあ」

「アタシもやねん、実は。初めて平次に会った時から……あれ？　やつぱり最初は『平次くん』って呼んでたかもしれへん」

「せやったか？」

「うん。お父ちゃんの上司の息子やし、さすがに初対面では呼び捨てにせえへんよ。平次と違てな！」

「何や、それ！？　オレが何か悪いみたいやんか！」

「別に悪いとは言うてへんよ？　ただ、ちょーっとマナーっちゅうもんがなつてないって言うてるだけや」

「一緒や！」

「一緒ちゃう！」

……と、エンドレスに続きそうな会話は、関西弁かつ静かな雰囲気には似合わない声の大きさのせいで、周囲の客にも丸聞こえであり、辺りからクスクス笑いが聞こえてくる。

「ホラ、平次のせいで笑われたやんか！」

「なっ！　オレだけのせいとちゃうやろ？！　元はと言うと、和葉が意味分からんこと聞いてきたせいやないか！」

「何でアタシのせいになるんよ！」

さらに、まだまだ続く喧嘩のような会話に、ますますクスクス笑いは大きくなる一方。

「もう、エエわ。平次に聞いたアタシがアホやった。もうエエよ、忘れてくれて」

「なっ、何や、その終わり方は！アカンで和葉！関西人としてなつとらんぞ！きちんとオチをつけなアカンやる！」

「オチなんかあらへんに決まってるやる！…ったく、人がマジメに聞いてんのに、何やねんアホ…」

「アホって言うなや、ドアホ！」

「アホにアホ言うて何が悪いんや！」

「悪いに決まっとするやる！…あ、そういえば」

「決まってるへんわ！…って何？」

「いや、何でもないわ」

「何よ、気になるんか」

「んなことより、和葉。帰るで。さすがにこれ以上は営業妨害やる」

言われて辺りを見回せば、自分たちに全ての視線が向けられている。

「せ、せやな…」

と、そそくさと退散することに。

『あ、そういえば』と、平次が思い出したのは、初めて和葉と出会ったときのこと。

いきなり『和葉』と呼んで、後で父親に怒鳴られた時『オレはエエんや！』と、独占欲の塊となっていたことを思い出していたのを、

和葉は知らない。

ちなみに、それが“恋愛感情”なのか“子分だから”なのかは、今
となってはもう分からない永遠の謎である。

Case 2 平次 and 和葉（後書き）

みなさま、こんにちは。未だに勉強があまり手についていなくてピ
ンチのペロロです。

明日も、模試だというのに頭の中はコナン一色。
ということで、予定通り更新できました。

今回は、平次と和葉ですね。

甘い雰囲気には程遠いのではないかというのがうちの予想というか、
想像なので、この辺りのせい？ で、あらすじの「目指してるけど
」の件になるわけです。

平次と和葉の1番の魅力が漫才だと思っているペロロにとっては、
こうしたテンポのいい会話がすごくいいなと思ってしまっわけです。
久しぶりに平次と和葉の関西弁をかけて満足しています。

結局、和葉にとっては謎のままとなってしまった今回の質問。こ
れが、繋がっていくはずです。

次回は、快斗と青子。最近好きなこのコンビは、どのように動い
てくれるのか。楽しみにしていただけたら嬉しいです（*ハハ*）

これからも、まだ続くと思いますのでよろしく願いしますね。

Case 3 快斗 and 青子

新一が小学校1年生の頃を思い出して赤くなっていた時、そして、平次と和葉が喫茶店で客に笑われていた時。

中森青子は、快斗の家で、新作だというマジックに魅了されていた。

「すごい、快斗！」

「サンキュ」

マジックショーはとりあえず終了し、2人でゆったりと過ごす秋の日の午後の風景。

余韻に浸りながらも、青子は口を開いた。

「快斗…。何で青子のことを呼び捨てで呼ぶの？」

「…はい？」

まさか、マジックの直後にこんな質問が飛び出してくるとは、さすがに快斗も予想していなかった。

「だからね。どうして『青子』って呼ぶの？」

「何だよいきなり、そんなこと…」

「別に意味はないの？」

「え、意味っていうか…。じゃあ、何で青子はオレのこと『快斗』って呼ぶんだ？」

と、切り返す。

「快斗は快斗だもん！ 他の呼び方なんてかえって不自然になっち

やう」

「だろ？ オレも同じだよ。青子は青子だし」

何だか上手に切り抜けられたような気がしないでもない青子は、悔しいのか何なのか…

「キッドだったら青子のこと『お嬢さん』って言うじゃん」とボソツと呟いた。

それを聞き逃すはずのない快斗は、瞬時に気配を夜のものに变えて、

「では、私の時も『青子』と呼んでもよろしいのですか？」と問う。

青子の幼なじみの快斗のもう1つの顔…。

組織は壊滅に追い込んだものの、パンドラは見つかっていないので、未だに夜の顔、キッドとしての姿も持っている。

「青子が言つ或者说うのもなんだけど、ダメだよ、キッド。キッドの時は『青子』って呼んじゃダメ。それだけでも快斗が疑われる原因になっちゃうんじゃないの？」

「…ご心配いただき、ありがとうございます。ですが…」

と、ここで気配を戻し、

「怪盗キッドは確保不能の大怪盗！ んなことでヘマはしねえよ」と自慢気に言う。

「でも、快斗の時だけでいいよ。『青子』って呼ぶの。ゴメンね、変なこと聞いて」

「いや、別にいいけど。心配してくれるの嬉しかったし。でも、何で突然？」

と、もともとの発端を尋ねる。

「うん、実はね…。この間、蘭ちゃんと和葉ちゃんと園子ちゃんと一緒にいる時にね、園子ちゃんが『幼なじみっていいね。呼び捨てにされて、愛されてるじゃん。今度、何で呼び捨てなのか聞いてみなさいよ?』って言ったから…。蘭ちゃんと和葉ちゃんと相談して今日聞こうってことにしたの」

「園子ちゃんが…」

ってことは、名探偵と、西の探偵くんも今頃こんな風に迫られてるってことか。

とは、快斗の心中である。

さて、快斗が青子を呼び捨てにする理由は、実は、本人が覚えてないだけで青子が言ったからである。

初めて出会った時計台の下で、バラを出した後、

『ありがとう！マジック上手なんだね。あ、私、青子。中森青子って言うの。青子って呼んでね!』
と言ったからだったりする。

青子本人は、誰にでもそのように言うから全く覚えていないだけで、快斗の方はこの時完全に一目惚れだったのだ。

あの時は、あのマジックしか出来なくて、あれだけになってしまったが、あの笑顔が見たくてマジックを必死で練習したと言えば、青

子は何て言うだろうか。

まだ、そのことは快斗の思い出の中に秘めておくことになっている。

それを言うのは、まだまだずっと先のこと。

快斗が青子にプロポーズする時なのだが、さすがに、この2人はそんなことを知るはずもないのだ。

Case 3 快斗 and 青子（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。
どんどん涼しくなってきましたけど、体調などは崩しておられませんかでしょうか？

さて、今回は、快斗と青子のお話。快斗が思い出していた場面は、もちろん時計台の下でのあのマジックをやったシーンのことです。そして、キッドだと知ってたりしますよ、青子さん。最近、青子が快斗の正体を知ってるというパターンにハマってます。ということで、ビミョーに甘め仕様。

今回は、オマケです。あんまり大したことじゃないですけど、楽しみにしてくれたら嬉しいです（*^_^*）

いつも、感想ありがとうございます。まだまだコメントいただけたら嬉しいです♪

では、これからもよろしく願いしますね。

オマケ1 男共の疑問

蘭からの呼び捨てについての理由を聞かれた次の日、新一は大学の図書館でいつものように、いつもの席で本を読んでいた。読み出してどれぐらい経った頃だろうか。

向かいの席に誰かが座ったのに気づき、顔を上げた。すると、そこには、

「よ、新一」

と手を軽く挙げた快斗の姿が。

「やっぱり新一、ここにいた」

「何だよ、やっぱりって」

「だって新一、いつもここにいるじゃん」

「うつ…。んで？ わざわざオレに何の用だよ？」

「あー、うん。新一も昨日聞かれた？ 蘭ちゃんに」

「あ？ 何をだよ？」

「『どうして私のこと“蘭”って呼び捨てにするの？』って」

「いちいちマネすんじゃない？ おい、お前聞いてたのか？ …あれ？ “も”ってことはもしかして、お前も…？」

「うん。青子に聞かれたから」

と、頷く快斗を見て、新一は本を閉じて言った。

「何か、園子に聞けって言われたみたいなんだけど」

「そうなんだよね。何で分かる？ 新一」

「いや、あれから考えてただけで分かんねえ。黒羽は？」

「オレもなんだ。だから、新一なら分かるかと思って聞きに來ただけど。やっぱり分かんないかあ」

そして、2人して図書館でうんうん悩むうちに、新一が気がついた。

「そういえば、蘭の話だと、その時和葉ちゃんもいたんだよね？
ってことは…」

「そうか！ 平次もだ。…アレに分かると思う？」
「うーん…」

と、再び悩みだしたその時、図書館に大音量の関西弁が響き渡った。

「おー、工藤に黒羽！ エエとこにおった！ ちょっと聞いてんか？」

「バツ…ここ図書館だぞ！ 静かにしやがれ！」
「あ、スマン…」

と、平次は2人の元へと歩み寄る。

そして、新一の右隣に座り、

「ふう」

と一息ついた。

「で、何だよ、服部？」

と新一が話を促すと、

「せやせや！」

と思い出したように一気に話し出した。

「昨日、いきなり和葉に呼び捨てにする理由を聞かれてんだけどな、それがアイツ、ネタやない言うねん。ってことは、本気で聞いとるわけやる？ せやから、どう答えたらいいか2人に参考までに聞きたい思てんけど…」

何とすごい内容であろうか。

「平次、ネタって言ったの？ 和葉ちゃんに」

「へ？ いや、正確には『オチは？』って聞いたうちゅう感じやな」

「はあ」

「何やな2人してタメ息なんぞつきよってからに。幸せが逃げんで？」

「いや、服部…。いや、何でもねえ」

「何やねん工藤！ ハッキリ言えや！」

「黒羽、任せた」

「え、オレえ！？ しゃあねえな。平次、それな、園子ちゃんが蘭ちゃんや青子にも聞いてみるように促した質問なんだよ」

「何や、それ？ 何でや？」

「それが分かんねえから悩んでたんだよ。やっぱり最初から服部に聞くって決めてなくてよかった」

「確かに…。ネタかと思ってたんじゃ、和葉ちゃんも可哀想だね」

「失礼なやつちゃな！ 2人とも」

「最近まで自分の嫉妬を『子分を取られる』で片付けてた奴にはムリだよ」

「うつ。…2人とも分からののか？ 何であのネーちゃんがそんなこと聞くようにアドバイスしたんか」

「そうなんだよねえ。マジで何でなんだろう。多分、促されるままにオレらに聞いているだろうから、青子たちは何も分かってないだろうし」

「何やねん、IQ400も持つとるのに。役に立たんなあ」

「そういやそうだ！ 黒羽も無駄にIQあるんだから少しぐらい分かってもいいのに」

「なっ…！ そういう2人はどうなんだよ！？ 探偵2人も集まってこのザマかよ？」

「何やと！？」

「おい、その辺にしとけ。ここ図書室だぞ。他の人に迷惑だろ？」

「…ハイ」

「何だよ、新一も言っただくせに…」

「それにしても、何なんだ？ 園子のやつ」

と、今度は3人で悩むも、結局、結論は出なかった。

いい男が3人よっても、『文殊の知恵』にはならないらしい。

オマケ1 男共の疑問（後書き）

みなさま、こんにちは！　なんと2日続けての更新が奇跡的にできたペロコです。

そんなうちは、現在、中間テスト真っ只中だったりするんですが（汗）、小説書いてます。

さて、今回のお話は…

オマケ〜！　ということ、男共に悩んでいたきました。新一ぐらいは分かるという設定にしてもよかったんですが、なんとなくそれじゃ面白くないので（爆）

だって、1話で園子ちゃんに感謝してるし。ということは、気づいてたんじゃ！？　と思われるかもしれませんが、あれは天然だったというか、素だったということ（笑）

そして、それぞれの呼び方。平次は変わっていないというか、全員名字。新一も。快斗は、単に新一と口調がかぶるのでそれを区別するためですね。下の名前で呼ぶのは。

3人でポンポン会話しているのも、結構うるさかったりすることに、誰も気づいていないというバカさ加減が自分では結構お気に入りだったりします。

今回は…次で終わりですね。中間テストが終わったら更新しようと思います。

女の子のお話ですので…ま、楽しみにしてくれたいいなと思います。

オマケだけは、甘いというよりもギャグですから（笑）

いつも、メッセージや感想などありがとうございます！

これからもよろしく願いしますね。

オマケ2 園子の本音

「何てことなの！？ それって、蘭しか理由が分かってないってことじゃない！！」

と、思わず声を荒げて叫んでしまったわ。レディとしたことが…。

あ、私、鈴木園子。これでも…って自分で言うのも変だけど、財閥のご令嬢でえす♪

で、今の状況を説明させてもらうと、ここは私の家の広間。

メンバーは、私と蘭と和葉ちゃんと青子ちゃん、今、昨日の報告を聞いてたところなんだけど…。

和葉ちゃんはネタと勘違いされるし、青子ちゃんはうまく誤魔化されてるし、結局ちゃんと理由を聞き出せたのは蘭1人！ な〜んて悲しすぎるわよ。

「落ち着いてえな、園子ちゃん。確かにネタや思われたんはムカつくけど、せやからって何も園子ちゃんが怒らんでも」

「そうだよ！ 快斗に誤魔化されるのはいつものことだし…ね？」

「ハア〜…」

何でこんなにいい子なのに、あんなやつらに引っかかってしまったんだろう。

まあ、そこが幼なじみの強みとでも言うのかしら？

「どうしたの？ 園子」

「いえ、何でもないわ」

いつも、事件事件で蘭のことを放ったらかしにしてる男と、純粋な

乙女心を全くもって理解していない男と、マジックは上手だけどポーカーフェイスで何考えてるのか分からない男。

「そういえば、何で突然あんなこと言うたん？」

「あ、そうそう！ 青子も気になってたの」

「ああ…。最近、気にしてたでしょ？ あやつらのファンクラブだか何だか知らない集団が狙ってたこと」

「……」

「だから、ゆっくり話す機会でも与えてラブラブしてもらって、その人たちのこと牽制してもらおうと思ってたのよ」

「氣いついてたんや…」

「当たり前でしょ！？ 表情にすっかり出てたわよ？ なのに、あやつらの前じゃ笑顔になっちゃうし。ムリしてたんでしょ？」

そう。私が蘭たちの表情が暗いのに気づいたのは、2週間ほど前のこと。辛そうに向ける視線の先には、もちろん彼らの存在。…ハーレムのような、ね。

どこから見ても、作ったような笑顔しか浮かべていないのはよく分かるんだけど、それでも不安なのかしらね。彼女である蘭たちの存在を知っていながら近づくんだから。

もともと、馬が合うのか、古い知り合いだからなのかは知らないけど、3人で固まってるが多かった。まあ、蘭たちが仲良かったってことが1番の原因でしょうけど。

大学内でもトップ3の人気者が集まったら、そりやもう、すごい騒ぎよ。

3人が3人とも彼女にベタ惚れなのを除けば、容姿もバッチリだし、頭もいい！

オマケに人を惹きつけるようなものを持ってりゃ、ファンクラブなんぞが出来るのも、まあ無理はない。

でも、その彼女たちの様子にも気づかないんだもん。
ここは、園子様が一肌脱がないといけないでしょう！

「心配してくれてありがと、園子」

「でも、大丈夫やから。もう慣れてるし」

「それに、何だかんだ言っても、青子たちのことちゃんと見てくれるしね」

「あゝあ、惚気ないでよ、もう！」

と、笑いかけてくる彼女たちに言い返す。

「べつ、別に惚気てなんか！」

「ハイハイ、それが普通なんですよ？ これだから天然の惚気ってのはタチが悪い」

「もう！」

と、笑う。うん、やっぱり笑顔がいいね。何か、みんなの父親みたいな気分よ。

あゝあ、真さん、元気かなあ？ まだまだ世界中の人と闘うって言って飛び回ってんだもん。

真さんにも『園子さん』じゃなくて、『園子』なんて呼ばれてみたいなあゝ

で、私も『真』とか、呼んじゃうの。キャー、照れるゝ！

そういえば、あの3人、何で聞かれたのか分かるのかしら？

まあ、悩むといいわ。今まで蘭たちがどれだけあやつらのことで悩んできたことか。
せいぜい悩み続けるのね。

後書き

こんにちは！ ペロコです。

『Calling her name』いかがでしたでしょうか？
あらすじに書いていたように、うちにとっての「甘め」という設定
にしていたんですが、これが限界のようです。

達成…できてましたでしょうか？

新一については、有希子さんの助言。

平次については、自分の独占欲。

快斗については、青子ちゃんからのお願い（？）。
という結論に達しました。

みなさんは、どれがお気に召しましたか？

平次と和葉では、『キッドside』最終話以来の関西弁が書けて
個人的には楽しかったです。

漫才している2人が1番スキなので（*ハハ*）

そして、オマケについて…

こちらは、完全にギャグテイストになっていました。

オマケ1での後書きにも書きましたが、それぞれの呼び名は、
新一・平次が「名字」で、快斗が「名前」で落ち着きました。
きっと、もっと仲良くなったら新一は「快斗」と呼ぶんでしょうけ
ど、「平次」とは呼ばないんだろなぁと思っています。（コナン
のときからのクセで）

いつか、そんな話も書いてみたいと思っただけです。

オマケ2では、園子の一人称に初挑戦！ … あえなく撃沈です。
何かがおかしいんですね。頑張っただけなんですけど。

まあ、もともとはこんな考えの下で、3人にアドバイスをしたという
ことにしてください。

久しぶりに普通のお話というか、キッドとコナン（新一）という組
み合わせの出でこない話を書いて新鮮でした。

キッド自体は、書いているんですけどね。やっぱり書かないと落ち
着かなかったというか。

最近、何か書きたいのにネタが出てこないという悲しい事態に陥っ
ています。

記念日だけは投稿しようと考えているのですが、普通に短編が書き
たいんですね。

… 何か、ネタありません？ （爆）

いや、マジで。何かリクエストくださった中で書けるかと思うも
のがありましたら、本当に書くと思いますし。（笑）

よかったですね。

… そんなうちの個人的な事情は置いて、お楽しみいただけたの
なら嬉しいです。

評価や感想なども、いただけたら、なお嬉しいです！

では、これからもよろしくお願いしますね。

入
口
門

2
0
0
7
.
1
0
.
1
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7913c/>

Calling her name

2010年10月9日11時35分発行